

皆さんは「越境学習」という言葉を聞かれたことがありますか。

越境学習とは、自分が所属する組織の枠を越えて学ぶことです。日常の職場とは異なる環境に身を置いて活動することで自分自身の軸を再発見する機会を持ち、不確実で変化の激しい今の時代を切り開く力を身につけられると期待されています。石山恒貴法政大学教授

ナビゲーター

授は「越境」について、物理的に「社外」であることが重要なのではなく、心理的にHomeかAwayかの違いであると説明します。自分の常識が通じないAwayな場での「葛藤」とどれだけ向き合えるかが成長につながります。越境学習の例として、社会人大学院、社外留学、プロボノ（各分野の専門家が職業上持っている知識やスキルを提供して

産業カウンセラーの現場から 相談者の思いに共感して伴走する

キャリア開発と組織イノベーションに期待

社会貢献するボランティア活動）などがあげられますが、Awayな場という意味では、育休取得など身近にある環境も、越境学習の場になりうるかもしれません。越境学習は近年急激に注目されるようになってきました。人生100年時代の到来、震災や新型コロナウイルス感染拡大、急激な技術革新など、社会変化の中で自分の人生やキャリアについて見直す人々が増えてきたからかもしれません。

社会課題に取り組むNPOを支援するプロボノ活動で越境学習を体験した人の感想を紹介しましょう。

Aさんは会社の合併を経験して自分が社外で通用するの不安を感じ、初めて越境活

注目される「越境学習」

動に参加しました。会社では営業職として実績のあるAさんですが、実は内心戦々恐々だったそうです。多様な社会人で構成されるフラットなチームでの活動は戸惑いの連続でした。NPOの人々の社会課題に取り組む熱さに新鮮な驚きを感じ、発想の異なる社会人仲間のやり方に刺激を受ける中で、自分の強みと弱みが少しずつ見えてきたと言います。

Bさんは定年を前にしたセカンドキャリア研修で越境学習について知り、NPO支援の社会人チームに手をあげました。自分の発した言葉がチームの中で通じなくて戸惑ったり、年齢や性別の異なるチームメイトとのコミュニケーションに悩んだりしましたが、互

いの価値感を丁寧にすり合わせながら一つの目標に向かって活動して得た達成感は大きく、チーム運営に自信を持ちました。定年後も若い人と共に会社を盛り立てたいと思ったそうです。

越境学習は本人の成長やキャリア開発への効果はもちろん、組織に還元される効果も大きいと考えられています。不確実で変化の激しい現代社会では、イノベーションにつながる新しい発想が求められます。新しい発想は多様性の中で触発されると考えられ、企業の中から担う人材の育成に越境学習が期待されているのです。実際、組織として「越境学習プログラム」を導入する企業も増えてきました。これからはますます楽しみです。

【日本産業力カウンセラー協会会員 産業力カウンセラー 国家資格キャリアコンサルタント 1級キャリアコンサルティング技能士 大澤美紀】

(火曜日に掲載)

